

24 樵夫

樵夫 しやうふ

終南捷逕任人笑

終南の捷逕人の笑うに任す しゆうなん しょうけい まか

華嶽肥遯送我年

華嶽に肥遯して我年を送る かがく ひこん われとし

世上榮枯會不識

世上の榮枯會つを識らず せじょう えいこ あ し

白雲深處枕薪眠

白雲深き處に薪を枕にして眠る はくせん しみくさ びんた まき まくひ

語釈

樵夫しやうふ 薪まききこり、山やまの木を伐り薪まきや炭すすを作る人。薪まき 木、燃料。終南しゆうなん 中国に在る山の名。捷逕しょうけい 近道、必しも正道に従わぬ。華嶽かがく 華山、

中国の山の名、五岳の一つ。肥遯ひこん 心にゆとりをもち俗世間から逃れ隠れる。世上せじょう 世間、世の中。榮枯えいこ 草木の茂ること、枯れること、転じて人や

家が栄えたり、衰えること。會あ 會つ、会合。識し 識る、知る、認識。白雲はくせん 白雲。白雲はくせん 白い雲

通釈 中国の終南山の近道を人の笑うのに任せて、中国華山に心にゆとりをもち俗世間から逃れ隠れ私は老後を送る、世の中で家が栄えたり衰えたりに会つのも知らずに、白雲たなびく高い山で薪を枕に眠るとしよう。

25 釣父

ちようぶ
釣父

紅蓼白蘆秋映衣

「こじりちり」 紅蓼 「びやく」 白蘆 「あき」 秋衣に映ず

一竿名月晚忘歸

「いつかん」 一竿 「めいげつ」 名月 「ばん」 晩に歸を忘る

有人來問吾眞樂

「ひときた」 人來りて問う吾に眞の樂有りやと

笑指碁溪舊釣磯

「わら」 笑いて指す碁溪の舊釣の磯

語釈

「こじりちり」 紅蓼 〓 紅葉した蓼 「あき」 紅の蓼 「びやく」 白蘆 〓 蘆の穂が白いさま。映 〓 映える、映る。一竿 〓 一本の竿の長さ。名月 〓 中秋の名月、十五夜の月。眞樂

〓 本当の楽しみ。舊 〓 旧古い。〓 中国の川の名、太公望が釣りをした所と、言つ。磯 〓 磯。河原、波が岸辺を洗う所、水が激しく岩にぶつかる、それとなく諫める。

通釈 秋に紅葉した蓼に蘆の穂が白く衣に映える、竿の高さに上った名月を帰るのを忘れて見とれている、人が

来て私に本当の楽しみが有るかと問う、太公望が昔釣りをしたと云う磯を笑って指さす。

26 題獨立書後

獨立どくりゆうの書後しゆごに題だいす

恢復中原志こくわん回伸

中原ちゆうげんに恢復かいするも志しは伸のび回がたし

依々回首故丘春

依々い首いを回めぐす故丘こきゆうの春

圓頭寧為桑門弟

圓頭えんとう 寧ねい為えい 桑門そうの弟

辮髮何成韃虜民

辮髮べんぱつ何なんぞ韃虜だつりよの民たみと成なりす

素家風喜書巧

懷素かいそ 家風かふう 書しよの巧たくみなるを喜よろこび

孤山遺韻愛詩新

孤山こざん 遺韻いしんの詩しを愛あして新あらたなり

魯連蹈海終東

魯あるかは連つじなりて海うみを蹈ふみ終ついには東ひがしなり

眞是天間獨立人

眞てんかんに是これれ天間てんかん 獨立どくりゆうの人

語釈

中原ちゆうげん＝平原へいげんの地、古代中国の中央部、黄河の流域、恢復かいふく＝志しが大きい、大きい広い、恢復する。伸のび回がたし＝伸のびがたい、かたい、ついに、

そこで、依々い＝名残惜いしく離れ難いさま、枝えだのしなやかなさま、おどおどしたさま。故丘こきゆう＝古い丘、古陵、故郷、古里。回めぐす＝頭あたまを回めぐす。圓頭えんとう丸まるい頭、坊主頭。寧ねい＝安やすんじる、安らか、穏やか。桑門そうもんの弟てい＝仏門、僧侶の弟子、辮髮べんぱつ「組髮」、頭の回りを剃り、中央部の髪を長く後ろに伸ばしそれを編んでに垂らしたも。韃虜だつりよ＝満州族、清の朝廷をいう。韃だ＝打うちつ。懷素かいそ＝なつかしむ、思おもつ。家風かふう＝其そのの家の風習。書しよの巧たくみを（書かきの上手な、能筆、達筆）

孤山こさん＝故郷の山、孤立、独り立つ山。遺韻いゆん＝遺された詩や文、詩賦、歌曲。詩新ししん＝新しい詩。魯ろ＝愚か。海蹈かいとう＝海を渡る。終東しゅうとう＝秦の支配を受けるより東海に身を投じた方がましと云った故事、東海で終わる、の意。独立どくりつ＝独り抜きんでている人。独立どくりつ＝解釈参考。

通釈 黄河の流域の地は回復するも志は伸びることは難しい、名残惜しく離れ難く頭を巡らして見渡す故郷の春

坊主頭で安らかになる仏門の弟子となり、弁髪組髪をし鞭虜だんりょの民となることが出来ようか、その家の風習、は書の上手なことを喜ぶ、祖先の遺された詩や文を新らたに愛でる、愚かなことは連なって海を渡って終いに東にきた、本当にこれが廣く独り抜きんでている人である。

解釈 独立について。明僧が明末の乱に遭い、僧隱元と共に東渡し、長崎に寄寓していた頃岩国藩主吉川廣正、

廣嘉公の招聘に応じて來岩したのは、寛文四年から同九年まで前後五回にわたっている。独立は二十五歳で官を辞し、杭州の西湖に遊び、後に明の義勇軍に投じ屢々清の軍を悩ましたが、時に利なく明の滅亡に會し、やがて我が国に渡來することになり、明室の復興を企画するも志し成らず、剃髪して独立性易といひ僧籍に入る。独立の岩国藩えの功績は医学だけでなく、儒教に学芸界の詩賦、文章、書画、茶道などの上に貢献している。「西湖志」を通じて錦帯橋の構想に重大なヒントを与え、五連木製の奇橋の出現のもとと成った。

誰帯宿醒下御牀

誰か宿醒を帯て御牀を下りる

無細腰力艶紅粧

細腰力無く艶し紅粧

可憐絶代懷殊色

憐む可し絶代殊色を懷つ

遺恨千年欠一香

遺恨なり千年一香を欠く

如不觸名苦子美

如かず名に觸れるは苦に子は美なり

教解語惱三郎

解語して惱む三郎に教るが若し

春風睡着會難覺

春風に睡り着き會つこと覺え難し

疑是前身其姓楊

疑うらくは是の前身其の姓は楊

語釈

海棠 ばら科、四月頃淡紅色の五弁の花を咲かせる、なよなよとした美人の形容。宿醒二日酔い。帯す二帯びる、おびを巻く身につける

身に付く。牀二台、腰掛け、寢台。細腰二細腰、柳腰。艶しい二つややかな、艶めかしい。紅粧二紅の化粧、装い・絶代二世に並ぶ者、が無いほど優れている、絶世。殊色二とりわけ美人。懷二懐かしい、思い。遺恨二残る恨み晴らされない恨み。一香二一つの香。春風二春風春、の風。前身二現世に生まれ出る前の身、以前の身分、履歴、状態。姓楊二姓は楊、楊貴妃か。

通釈 誰か二日酔いのまま寝台を降りる、柳腰もたおやかに艶めかしく紅の化粧、憐れむべし絶世の美女のことを思う、恨みが遣る千年その香りは失せている、そうではない名に触れるはしたしく貴女は美しい、解き語り悩む三郎に教えるようである、春の風に眠り夢で会うことも難しいだろう、疑わしくもこれは以前の身分はその姓は楊名は貴妃か。

28 遊小赤壁弔獨立師

小赤壁しょうせきへきに遊びどくりゅう獨立りつの師しを弔とむらう

天高氣爽夜寂々

てんたか きさわやか
天高く氣爽なり夜寂々たり

與客泛舟小赤壁

とせ
客と與ともに舟うかへを泛しる小赤壁しょうせきへき

々々如壁千尺高

せきへき
赤壁 壁せきの如ごとく千尺せんじやくの高たかさ

懸崖蒼松白露滴

けんがい そうしよう びやくる したた
懸崖けんがいの蒼松そうしよう 白露びやくる 滴したたり

東山月出波如金

とうざん げつ いでて ば ごとく かね
東山とうざんに月出げつ いででて波金ば かねの如ごとく

舉觴高歌意甚適

しやう あ たかか い せき だ たい
觴しやうを舉あげ高歌たかかして意いは甚せきだ適たいう

想昔海客舟此浮

かう せき かいかく せん ち に ぶ
想かうつ昔せき 海客かいかく 舟せんを此ちに浮ぶべる

遺世獨立飄々遊

のこ ひとりに ちりちり びやうびやう
世のこに遺ひとりにる獨立ひとりに 飄々ちりちりとして遊びやうぶ

品云山勢似赤壁

あまね さんせい せきへき
品あまねく云さんせいつ山勢さんせい 似にたりと 赤壁せきへき

云了忽起故鄉愁

おもわ うれ うれ
云おもわいり了うれ忽うれ起うれす故鄉こきやうの愁うれいを

山下低徊不忍去

さんか ていかい しのぶ
山下さんかを低徊ていかいして去しのぶるに忍しのぶびず

東方已白纒回舟

とうほう すで しろく せん かい せん
東方とうほう已すでに白しろく纒せんにして回かい舟せんを回せんす

佳話嘖々傳遍國
赤壁之名自此得
獨立逝後幾百年
斷岸千尺猶依然
泝流下流弔獨立
流風餘韻猶存焉
嗚乎獨立豪傑士
獨為中原抱大耻
遺世飄然豈志哉
天已亡明君已矣
假使上天翼朱氏
君其定舉恢復師
譬如周郎赤壁戰
一戰塵清斷可知

佳話 かわ 嘖々 さくさく と傳 つた わること國 くに に遍 あまね し
赤壁 せきへき の名 な 自 みづか ら此 こゝ に得 え る
獨立 どくりつ 逝後 しせい 幾百年 いくひゃくねん
斷岸 だんがん 千尺 せんじやく 猶 なほ 依然 いぜん たり
流 なが れを 泝 さかのぼ り流 なが を下 くだ りて獨 どく 立 りつ を弔 とむ う
流風 りゅうふう の餘韻 よゐん を猶 なほ 焉 い んぞ存 ぞん ず
嗚乎 あゝ 獨立 どくりつ 豪傑 ごうけつ の士 し
獨 どく り中 ちゅう 原 げん を為 な して大耻 たいぢ を抱 かか える
世 よ に遺 ひ すは飄然 ひょうぜん として豈 いかん 志 しか 哉 かな
天 あま 已 み に明 めい 亡 ほろ びること君 きみ 已 や んぬる矣 かな
假 たす に天 あま に上 あ ら使 し めて朱氏 しゆし を翼 たす けん
君 きみ は其 その れ舉 あ げるを定 さだ めて恢 ひ く復 また た師 し なり
譬 たと へば周郎 しゅうりやう 赤壁 せきへき 戰 せん の如 ごと く
一戰 いっせん 塵 ちん して清 きよ く斷 たつ を知 し る可 べ し

上天不翼明亡矣
蜉蝣且寄扶桑枝
當時同遊客多少
或乞書兮或索詩
不為書家則詩叟
誰知獨立心中悲
今日我來思往事
空對赤壁立久之
九原其奈人難作
作詩聊代招魂辭
嗟君已為東方土
吾聞魂無不之
今夜東西赤壁月
君在何處々々奇

上天は翼ず明は亡ぶなり
蜉蝣且く寄す扶桑の枝
當時 同に遊ぶ客 多少ぞ
或は書を乞い或は詩を索む
書家を為さず則ち詩の叟
誰知らん獨立のの心中悲しみ
今日我來りて往事を思ふ
空しく赤壁に對して立つこと久しく之く
九原其れ奈んせん人作し難し
詩を作り聊か招魂の辭に代る
嗟君已に東方の土と為す
吾は聞く魂は也た之かずと無す
今夜 東西 赤壁の月
君何處に在りや何處は奇なりや

定知黄州赤壁月

定め知る黄州 赤壁の月

浮舟人皆辮髮垂

舟を浮べ人 皆な辮髪を垂れ

故山雖好不忍看

故山好しと 雖も看るに忍びず

魂乎歸來此水湄

魂は乎歸り此の水湄に來たり

帶淚聊酌一杯酒

涙を帯びて聊か酌む一杯の酒

謹祭君靈君勿辭

謹みて君の靈を祭る君辭する勿れ

祭畢與客獻又酢

祭は畢く客と與に獻じ又酢いん

夜其深月西移

夜の其の深き矣 月西に移るを

不知松影落水上

知らず松影 水上に落ち

髣髴疑是獨立姿

髣髴たり疑うらくは是れ獨立の姿

語釈

小赤壁 錦帯橋の下流で今の臥龍橋の付近を昔赤壁に似ていることから小赤壁と云い地名が在った。獨立 性易、明の末に清との戦いで義

軍に投じて屢々清軍を悩ませるも、明の滅亡に会いわが国に亡命帰化して披剃して僧籍 に入り独立性易と称した。李延年、詩 北方有佳人遺世而獨立 蘇軾、前赤壁賦、飄々乎如遺世獨立羽化而登仙。氣爽 氣清爽、爽やかな 空氣、寂々 静かでももの寂しい。泛 泛、浮かべる、浮かび漂つ、広い、 広くあまねく。赤壁 揚子江の南岸の地名、三国時代、呉の周瑜が魏の曹操の大軍やぶった所、北宋の蘇軾が遊んだ所、彼はそこを三国時代の古戦場

と誤り、あるいは、仮託して前、後赤壁賦を作った。懸崖＝天から吊り下がっているように高くそそり立った崖、盆栽の茎や枝が根より垂れ下がっているもの。蒼松＝青松、青い松。白露＝白霧、白いつゆ。滴＝水滴が落ちる、細かい水玉がぼつとおちる。東山＝魯の城東の山。觴＝杯、觴。高歌＝高い声でうたう。海客＝舟の客、船遊びの客。遺世＝世間の事を忘れる。飄々＝飄然、風に吹かれて軽く上がるさま、翻る、さま、彷徨うさま、世間離れた。山勢＝山の形、山の高いさま。愁＝憂う、思う、物思い。山下＝山の下。低徊＝まよふ、さ立ち去り難い様子で歩き回る、あちこち行きぎして辺りを見回す。東方＝東海に身を投じた。纒かに、纒、僅かに、少。佳話＝良い話、清々しい話、嘖々＝鳥の鳴き声、口々に褒めそやす、叫ぶ、喧しい、遍く＝遍、遍くを隔々まで行きわたる、普遍。斷岸＝切り立った高い岸、崖、依然＝元の儘、昔を恋慕うさま、樹木が生い茂るさま。流湊＝流れを遡る。流下＝流れを下る、流れ落ちる。餘韻＝鐘など突いたとき、後に残る響き余音、詩歌などの言外の情趣、後に残る響き。豪傑＝才知が衆に優れた人物、武勇が人に優れた人物。中原＝古代中国の中央、黄河の流域の地方。大耻＝大恥、おおはじ。豈＝ねがう、ほつとする、どうして、なんと、その疑問、反語の助字。上天＝かみ、天帝。朱氏＝朱子、南宋の儒学者。翼＝翼る、輔翼。恢復＝回復かえる、もどる、めぐる。塵斷＝皆殺しにして断つ。蜉蝣＝かげろふ。扶桑＝神木の名、中国の東方、日の出る辺りの木をいう、扶桑のある所日本をいう。同遊＝共に旅する、一緒に遊ぶ。索＝引く、求める、探す、索引。書家＝書道家、文章家。詩叟＝詩翁、詩に巧みな老人、老詩人。心中＝心の中、胸中。往事＝過ぎたこと、昔時昔のこと。空＝虚しい、何も考えないで。九原＝春秋時代の晉の卿大夫の墓場の名、山西省に在った、転じて墓地、よみじ、あの世。聊＝聊か、少し、わずか、暫く。招魂＝死者の魂を呼び返す、心配事などで抜け出した生者の魂を呼び返して、元氣を取り戻させること。辭＝言葉。黃州＝いまの湖北省黄冈縣の地。辮髮＝組髮、頭の回りを剃り中央部の髪を長く伸ばし、それを編んで後ろに垂らした。水溜＝水の辺、みぎわ、きし。勿＝勿れ、なし、するな。畢＝おわる、おえる、つくす、ついに、つまり、ことごとく、みな。獻＝たてまつる、神に物を捧げる、目上の人に申し上げる、献上。酢＝酢、酸っぱい、すい報い、客が主人に酒杯を返す。松影＝松影、松の木の影。髣髴＝さながら、良く似たさま。

通釈

空は晴れて空気が爽やかである夜は静かで物寂しい、客と共に小赤壁に舟を浮かべる、赤壁は壁の如く切

り立ち高さは千尺もあろうか、天からつり下がっているような高くそそり立った崖の上の青い松から、想像するに昔船を此処に浮かべて客白い露が滴る、東の山には月がさざ波が黄金のように輝く、杯を手にして高歌高吟するのにとても似合うが遊んだことであろう、世間のことをわすれて人の力を借りずに立ち飄然として遊ぶ、遍く言う山の形が赤壁に似ると、言い終わって急に故郷を懐い起こす、山の下をさまよい歩き廻り立ち去り難い、東の空はもう僅かに白み舟を廻して帰路に就く、清々しい話口々に褒めそやし國に遍く伝える、赤壁の名は自ずからこつして得たものであろう、ひたひた独立が去ってから何百年、切り立って崖は今でも昔の儘である、流れを遡りまた下って独立を弔う、風の流れの後に残る言外の情趣がある、ああ独立は才知武勇が人にすぐれた人、独りして黄河の流域の大恥を抱える、世間のことは忘れて飄々として願う志であろうか、天既に亡ぼすこと明らかである君やむを得ないではないか、仮に天に上らさせて南宋の儒学者朱子を輔翼しよう、君はそれを挙げ定めて志が廣くまた師である、例えば周瑜と曹操の赤壁の戦いのように、一戦塵みなほりして清く断つを知る、天の神は翼たすけず明は亡びゆく、蜻蛉かげろふは暫くは寄せる扶桑の枝、在るところ（扶桑在るところ日本をいう）当時共に遊んだ船客多少ぞ、或いは書を頼み或いは詩を求め、書家ではなく即ち詩に巧みな老人を、誰が知るであろうか独立の心中の悲しみを、今日私は昔ありし日のことを思う、むなしく赤壁に対して立つこと久しくしていく、あの世のことは如何せん人を作ることはできない、詩を作り少々死者の魂を呼び戻して慰める詞に代える、ああ君は既に東方の土となっている、私は聞く魂はまた往かな

いものとみなす、今夜東西赤壁の月、君何処にあるか奇は何処にあるのか、運命を知る黄州赤壁の月、舟を浮かべる人は皆組髪を垂らした人、故郷の山を好むと言つても見るに忍びない、魂よ帰つて来いよこの水辺に、涙を帯びて少々酌む一杯の酒、謹みて君の霊を祭るも君の言葉はない、祭りは悉く客ともに奉りて酬いる、夜のその深いことよ月は西に移るを、知らず松影水上に落ちるを、さながら疑つのはこれが独立じちりつの姿。

29 哭釧南言、々々墓

釧南せんなんに哭こくす言いう、釧南せんなんの墓かぶ

在、東隣日光寺、

東隣とうりんの日光寺にかりんに在あり、

十載文場共鬪文

十載じゅうさいにして文場ぶんじょう共に文ぶんを鬪たたかす

豈圖隣寺著新墳

豈あにはか 圖ずらん隣寺りんじの新墳しんぶんに著しるす

淚餘為誦招魂賦

淚なみだ餘あまを誦よす招魂しょうこんの賦ふ

或有吟魂隔壁聞

或あるは吟魂ぎんこん 壁かへを隔へて聞きく有あり

一枕仙遊遂不醒

一いっ枕しん 仙遊せんゆうして遂ついに不醒さめず

生平憐爾眼相青

生平しょうへい 爾なんじを憐あわれみて眼相青あまし

獨披遺草不堪讀

獨ひとり遺草いそうを披ひらいて讀たえむに堪たえず

隣寺月舛初夜磬

隣寺りんじの月ます 舛しよや 初夜しよやの磬けい

語釈

釧南せんなん 人名、五竹の少年時代の学友。東隣とうりん 東隣。陽の生氣十載じゅうさい十年、十歳。文場ぶんじょう 文を学ぶ所、学問所、寺子屋。文鬪ぶんとうす 相競い

勉強をした。豈圖らんあはれむ意図した訳でなく。新墳しんぼん新い墓。著ちやく著し現れる。餘涙あまなみ流す涙があふれ出る。誦じゆ唱え暗唱。招魂せうこん死者の魂を呼び返す、心配事などで抜け出した生る、べる者の魂を呼び返して、元氣を取り戻させること。辭じ言葉。賦ふ述、詩歌を作る、唱える、詠つ。吟ぎん詠つ、詩歌を詠つ、詩歌。魂こん魂、人の生命を主宰する精氣、人の精神を主宰上に昇り、魄は地上に留まると言つ。一枕いつしん一眠り。仙遊せんゆう心から楽しみ遊ぶ。醒せい醒す、酩酊めいてい生平せいへい普段。平常。憐れん憐む。爾にその、なんじ、おまえ、そのとおり。眼相がんさう目の様子、顔形。獨りひとり一人、孤獨。遺草いそう遺稿、遺された草稿。披讀ひてく開き読む、広げて読む。堪かん堪す、堪える、我慢する。舛まじいよいよ、益々初夜しよや初めての夜。馨けい石や玉で作った打楽器、台に吊して鳴らす。卯ぼ東、午前六時。

通釈 十歳にして寺子屋で一緒に相競い勉強した、どうして意図しないのに隣の寺の新しい墓が現れる涙が溢れ

ながら誦える招魂の賦、或いは吟魂はあの世の壁を隔てて聞くことであろう、一眠りして心から楽しみ遊ぶ夢も遂に醒めないで、普段汝を憐れむ目の様子が青かった、独り君の遺された草稿を開いて読むことが出来ない、隣の寺にかかる月 初夜の馨がますます聞こえる。

30 孟蘭盆、僧徒脩

施餓鬼、戯賦

孟蘭盆、僧徒施餓鬼を脩めて、戯れに賦す

性僻平生嫌緇衣

性僻か平生 緇衣を嫌う

今朝懺悔始歸依

今朝 懺悔して始めて歸依す

生前難免詩窮甚

生前免れ難き詩窮すこと甚し

定知未來鬼亦饑

定知る未來の鬼亦た饑なり

語釈 孟蘭盆つらぼん 倒懸、逆さに吊すの意、祖先の冥土に於ける苦しみを救うために、佛に供え物をし僧に布施する仏事、陰曆七月十五日中空元くわんげんに行

われる、孟蘭盆會ともいう。僧徒そうだう 僧侶。施餓鬼せがき 無縁の死者の霊を弔って、読経し供養すること。脩しゆ ぼしし、干した肉乾く、おさめる、整える、長い、おさめる。戯れたわむ 巫山戯る、冗談に。賦ふ 詩歌を作る、唱える、詩歌を詩歌を詠う、詩の六義の一つ、心に感じたことをありのままに詠つもの「性僻せいへき 生まれつき癖、性向「平生へいせい 平素、日頃、普段、つねずね、平常、かつて、むかし、往事、往年。緇衣しがい 黒衣、僧衣、黒色。懺悔ざんげ 過去の罪を悔い改める、佛や人に謝罪し、夫れによって、罪や過ちが消えること。歸依きえ 佛を信仰してする。生前せいぜん 生きているとき、死後。未來みらい 将来、是から先、何時までも、永久に、永遠。饑う 飢える、穀物が実らない。

通釈 孟蘭盆に僧侶が、無縁の死者の霊を弔って、読経し供養を修める、冗談に詩を詠む。生まれつき癖か平

素から黒衣が嫌いであるが、今朝過去の罪を悔い改め始めて仏を信仰して継る、生きているときは逃れる事が出来ない詩を詠むことに窮まる事が甚だしい、運命というか将来の鬼、また餓鬼であることを。

31 午谷翁宅小集時

午谷翁の宅に小集の時

胡枝盛開、與青門翁

胡枝盛開す青門翁と玉乃公素お藤子賞と同一賦す

玉公素藤子賞同賦

胡枝種遍竹籬旁

胡枝の種て遍く竹籬の傍ら

千朶燦然全吐芳

千朶 燦然として全て芳を吐く

此花自可詩家圃

此花自ら詩家の圃になる可し

箇是花中錦繡腸

箇れ是の花は錦繡の腸に中る

語釈

午谷翁うひやうおん＝香川午谷翁かうがくうひやうおん、五竹の詩の先生。小集せうしゅう＝小集会、寄り合い。胡枝こし＝胡椒の枝、山椒、球形のの実をつけ、辛みが強い胡枝小さな実

を粉末にして調味料にする。芳香、日本漢詩では萩の枝の意にも使われる。盛開せいがい＝満開。青門翁せいもんおん＝山田城太郎、藩の重役。玉乃公素たまのこうそ＝藩校養老館の学友、後に初代大審院長。藤子賞とうしじやう＝子賞。後藤敬臣、五竹の学友。同賦どうい＝一緒に賦、詩歌を作る、詠う。種遍たねあま＝種隅から端まで、広く。竹籬たけし＝竹垣、竹の堀。旁はた＝傍ら、そばに、その辺。に。千朶せんた＝千の枝、沢山の垂れた枝。燦然さんぜん＝あきらか、鮮やか、光がきらきら光る、きらめくさま。全芳ぜんほう＝全ての芳香。吐と＝吐く、開く。詩家しや＝詩人。詩家圃しやかほ＝はたけ、菜園、果樹園、園芸、場所。野農夫ののうらふ、箇こ＝一個、一つ、一人。花中かちゆう＝花の中。錦繡きんしゆうの腸はらわた

＝蘇軾の詩 平成錦繡の腸、美しい詩文が自在に作られること。

通釈 午谷翁の宅に小さな寄り合いをした時、山椒の胡枝が盛んに茂り玉乃公素と藤子賞とともにして詩を賦し

詠む。山椒を竹の垣根の傍らに隅々行き渡るように植えてある、沢山の垂れた枝に明らかに全ての実が芳香を吐き

出している、この花自ら詩人の畑となるであろう、これこの花美しい詩が自在に作られることにあたる。

32 黙々辭

黙々亦黙々

問君何黙々

出門渾醉人

黙々語不得

東家愛釣魚

西家好勇力

狹邪在舍南

奕狄住舍北

上下又四維

無共語道德

古人吾欲語

骨冷難告臆

黙々の辭

黙々として亦た黙々

君に問う何んぞ黙々とす

門を出ずるは渾て酔人

黙々として語るを得ず

東家は釣魚を愛し

西家は勇力を好む

狹邪 舍南に在り

奕狄 舍北に住す

上下又た四維

共に語る道德 無し

古人 吾れに語らんと欲す

骨は冷やかにして臆を告げ難し

所以每黙々

所以 毎に黙々

々々寢且食

黙々と寝みても且つ食しても

借問黙々翁

黙々の翁に借問す

畢竟誰相識

畢竟誰れか相識る

明月與清風

明月と清風と

黙々入吾闕

黙々として吾が闕に入る

桃李雖不言

桃李とは言わずと雖ども

嫣然春馥々

嫣然として春は馥々たり

黙々常對彼

黙々として常に彼に對す

纔能破顔色

纔に能く顔色を破る

語釈

黙々の辭 黙して何も語らず。渾 水の湧き出る音、水が盛んに流れるさま、物事が分かれずにぼんやりと大きいさま、ひとまとめにする、

全て。醉人 酔った人、酒に酔った人。東家 東側の家。西家 西側の家。釣魚 魚釣り。勇力 勇氣と武力。狹邪 心が狭く邪悪、心が狭く邪である。

舍南 家の南側。奕狄 野蛮な夷狄。舍北 家の北側。上下 上と下。四維 四本の太い綱、國家を維持するに必要な四つの道義、礼、義、廉、恥、

四方の隅 道德 人の踏み行つべき正しい道、道義、老子の説いた道と徳。古人 昔の人。骨冷 大變に冷、酷、骨に凍みる冷たさ。臆 氣後れ、おじ

ける、胸、心、思い。告げ難く^{つがた}言いにくい、告げにくい。畢竟^{じきょう}終局の意、つまり、結局。相識^{あいきし}互いを知る。闘^{まいく}しきい、くぎり、域。嫣然^{えんぜん}おのうな、老女、あたためる。讓々^{ひんひん}香、ゆ たか、香気がさかん、芳香、名月^{めいげつ}十五夜の月、中秋の明月、清風纒^{せいふうせん}わずが、すこし清々しい風、清らかな風格。顔色破れ^{がんしよくやぶ}破顔一笑、相好をくずし。

通釈

黙々としてまた語らず、君に問う何で黙々とする、門を出る人は全て粹な人、黙々として語ることはしない、東側の家は魚釣りを愛し、西側の人は勇氣と武力を好む、心が狭く邪悪の人は家の南に在り、野蠻な夷狄は家の北に住む、上と下また国家を維持するの^に必要な四つの道義、礼、義、廉、恥、共に語る人の踏み行^う正しい道義はない、古^{いにしへ}の人私に語ろうとする、骨に沁みる冷たさに氣後れして言いにくい、所で以て常に黙々と、黙々と寝ても且つ食べても、黙々の翁にお聞きしたい、結局誰か互いを知る、仲秋の名月と清らかな風格を、黙々として自分の領域に入る、徳がある人には人が自然に心服するとはいわないけれども、あたたかな春は香りゆたかである、黙々として常に彼に対する、僅かに相好をくずして笑う。

33
夜吟

清夜に吟ず

銀潢影轉織翳絶

銀潢の影轉じ織翳 絶す

沆瀣横空冷徹骨

沆瀣 空を横たわりて冷 骨を徹す

秋蟾徐飛半穹窿

秋蟾 徐に飛びて半穹に隆し

万籟不動如白日

万籟動ず白日の如し

滿城塵夢呼不醒

滿城の塵夢 呼べども醒ず

辜負良霄万戸閉

辜は良霄に負て万戸 閉ざす

身是廣成赤松徒

身は是れ廣く赤松の徒に成し

名利之夢不會結

名利の夢 結びを會わず

木犀香裏夜不眠

木犀の香裏 夜 眠れず

鐵笛吹破滿山月

鐵笛 吹破す滿山の月

語釈 清夜に吟ず 清々しい夜に吟ず、詠む、詠つ。銀潢 銀色の水溜まり。影轉じ 影移り、影が動く。織翳 僅かな曇り、僅かな翳り。沆瀣 僅かな曇り、僅かな翳り。

沅水、川の名、洞庭湖に注ぐ、瀟、水瀟、渡し、渡し場、徹、貫徹、徹す。秋蟾、蛙、ひきがえる、秋の月。徐、徐々、徐々に、ゆっくりと。「空、空の半ば」隆し、高く、隆、高、万籟、万物の響き、多くの音声、風やその他全ての音。白日、日中、昼間。滿城、城に満ちる、城に一杯になる。村、街、塵、世上の煩わしいこと。醒、醒す。辜、つみ、とが、はりつけ、必ず。霄、霰、霰、遠、い空。万戸、一万户、沢山の家。赤松の徒、赤松子則ち仙人の仲間。名利、名誉と利益。木犀、庭木にする常緑高木、秋に黄茶色の小型の花を付ける、花は独特の匂いがある。香裏、香りのうちに。鐵笛、鉄笛、ラッパ。滿山、山に満ちる、全ての山。

通釈 清々しい夜に吟じる。銀色の水たまりに影が動き僅かな騒りもない、沅水の渡し場は空に横たわり冷たさは骨をも徹す、秋の月は徐々に上り空半ばと高い、風やその他全ての音動かず昼間のようである、街々に満ちる世俗の煩わしさ呼んでも醒めない、罪は晴れた夜に負て多くのの家を閉じる、身はこれ廣く赤松の仲間となる、名誉と利益の夢結び会わず、木犀の香りの中で夜眠れない、鉄の笛、ラッパの響きで破る全ての山の月。

34 趣今津途中即事

今津に趣く途中即事

右是川流左田畝

右是れ川の流れ左は田畝

前臨島嶼後山雲

前に島嶼を臨み後山は雲

小虫蝕蔬々似篆

小虫 蔬を蝕して蔬篆の似し

鯨魚吹水々成文

鯨魚水を吹きて水 文を成す

無名桼草秋湛愛

名無き桼草 秋湛く愛す

有語溪禽午入聞

溪禽に語 有るを午に入りて聞く

風景娛人忘路遠

風景人を娛まして路の遠きを忘る

出林祠即八幡君

林を出て祠あり即ち八幡の君

語釈 今津＝岩国市内。田畝＝田や畝。島嶼＝しま、こじま。山雲＝山に懸かる雲。小虫＝小さな虫。蔬＝青野菜。食用にする野の草や野菜の

総称。蝕＝蝕む、食う。篆＝竹筆、書体、印章、みじかい。鯨魚＝やまべ、おいかわ、淡水魚。水文＝波紋、水紋。無名＝名も無い。桼草＝野草、野
原の草。湛く＝湛る、ゆたか、ふける、深い。有語＝話している、語がある。溪禽＝溪谷の鳥類。午＝正午。辱。風景＝景色。娛＝娛む、娯楽。祠
＝やしろ、みたまや、まつる。即 八幡の君＝即ち八幡宮

通釈 右はこれ川の流れ左には田や畝が、前に島嶼を望み後ろの山には雲が、畑では小虫が青野菜を蝕^むみ野菜は短い筆のようである、やまべ、や、おいかわ、は水を吹き波紋をたてている、名もない野草の秋深く愛す、溪谷の野鳥の囀りを昼に入りて聞く、風景人を楽しませて道の遠きをわすれさせる、林を出ると祠があるそれは即ち八幡宮である。

35 秋雨懷馨堂

秋雨馨堂を懐う

城中故舊僅餘些

城中の故舊 僅に些かを餘す

吾亦病衰眼欲華

吾れ亦た病みて衰眼に華やかならんと欲す

灘響夜高知水漲

灘響夜高く水の漲を知り

雨聲秋悪覚涼加

雨聲 秋悪し涼の加るを覚るする

愁心己亂糸無緒

愁心己に亂れて糸の緒無し

喜事未來燈有華

喜事未だ來らず燈に華有り

幸有悲歌和宋玉

幸いに悲歌宋玉に和す有り

吟聲時起北隣家

吟聲時に北隣の家に起る

語釈

秋雨馨堂を懐う 秋雨の夜馨堂懐う、大草馨堂、五竹の潘校養老館の学友、城中、城中、市内、故舊 古くからの友人、知己、僅些

僅か、些細な。餘 餘り、残り、残る。衰眼 衰えた眼、華 華、はなやか、宋華、輝き、欲す 希望、求める。灘響 早瀬の喧しい音潮流が強く波の荒い海の波の音、響き。水漲 水が漲る、水が満ち溢れる、物事が満ち溢れる。涼 涼しさ。愁 愁う、思い。悲歌 哀しい歌、悲恋の歌。宋玉

戦国時代楚の人。

通釈 城中の古くからの友人ほんの僅かに残る、私は病んでいる衰えた眼に早く輝きが欲しい、早瀬の喧しい音に夜高く水が満ち溢れるのを覚える、雨音に秋深まり涼しさの加わるを覚える、憂う心既に乱れて糸の始めも終わりもない、喜び事未だに來ないが灯火に華があり、幸いに悲しい歌を戦国時代の屈原の弟子宋玉にあわすよつだ、吟じる声時に起こる北隣の家。

36 畫牛

牛を畫く

誰將春郊為粉本

誰か將に春郊 粉本を為す

工寫牧童牽牛返

工に牧童を寫し牛を牽いて返る

歸牛低頭嚙且行

歸牛の頭を低て嚙み且つ行く

芳草青々一路遠

芳草 青々として一路遠し

語釈

畫く＝画く、描く。春郊＝春の郊外、原田、野。將に＝ひきいる、すすめる、たすける、おくる、こう、まさに、もって、これ、それ、

かつ「粉本＝絵の下書き昔は胡粉で下書きしたので言う、後日の参考に写された絵、詩歌や文章の手本。工＝巧み、上手。牧童＝牛飼いの少年、童、牛

返す＝牛が向きを変ええる。歸る＝牛舎に帰る。牽＝牽く、引く。嚙＝嚙む、反芻する。芳草＝青い草、香りの良い草。一路＝一本の道、真つ直ぐの道。

青々＝青々と。

通釈

誰か当に春の郊外の絵の下書きを書く、巧みに牛飼いの童を写し牛を牽いて帰るを、帰る牛頭を低くして

噛みそして行く、香りの良い草が青々として真つ直ぐの道が遠し。

37 聞虫有感

虫を聞いて感有り

衡門秋草夕

衡門 秋草の夕に

颯々起涼颼

颯々と涼颼 起る

蟲聲起叢裏

蟲聲 叢裏に起り

唧々聲各奇

唧々として聲 各々 奇なり

蚓笛響荒砌

蚓笛 荒砌に響き

蛙鼓鬧前池

蛙鼓 前池に鬧し

絡緯音何聒

絡緯の音何んぞ聒し

蟀蟋聲何悲

蟀蟋の聲何んぞ悲し

清亮最可喜

清亮 最も喜ぶ可し

即是金鍾兒

即ち是れ金鍾の兒

中有無名蟲

中に無名の蟲有り

其聲細如糸

其の聲細く糸の如し

頤耳靜聽之
恍訝雨至時
其聲實種々
切々皆堪悲
有底不平事
終霄訴向誰
噫吾亦螺蟲
沈默是天資
欲言口訥々
清音使人樂
余也不能為
終日不出辭
聒々與切々
亦復不能之

頤^き耳^じ 靜^{じやう}に之^{これ}れ聽^きく
恍^{かう}訝^が雨^{あめ}に至^{いた}る時^{とき}
其^{その}の聲^{こゑ} 實^{じつ}に種^{たぐひ}々^{たぐひ}
切^{せつ}々^{せつ}と皆^{みな} 悲^{かな}みを堪^たえん
底^{てい}に不^ふ平^{へい}の事^{こと}有^あり
終^{しゆう}霄^{しやう} 誰^{たれ}に向^{むか}つて訴^{うた}えん
噫^{あゐ} 吾^{われ}れ亦^{また}た螺^ら蟲^{ちゆう}なり
沈^{ちん}默^{もく}するは是^{こゝろ}れ天^{てん}資^しなり
言^いわんと欲^{ほつ}すれど口^{くち}は訥^{とつ}々^{とつ}なり
清^{せい}音^{おん} 人^{ひと}を使^して樂^{たの}します
余^{あな}は也^なた為^なすこと^{こと}を能^{あた}はず
終^{しゆう}日^{じつ} 辭^いを出^いす
聒^{かつ}々^{かつ}と切^{せつ}々^{せつ}と
亦^また復^また之^{これ}を能^{あた}はず

多言老子戒

多言 老子が戒む

无言學宣尼

无言にして宣尼に學ぶ

聒囊寧无咎

聒囊 咎无するは寧し

饒舌使身危

饒舌 身に使て危し

語釈

衡門＝冠木門、粗末な家、隱者の家。颯々＝さつと吹く風の音。涼颯＝涼しい風、涼風。砌＝みぎり、軒の下に敷いた石畳。蛙鼓＝蛙の鳴

き声、蛙の腹鼓。叢裏＝草むら、草の裏。唧々＝小さい声、虫や鳥の密かな声。蚓笛＝蚓、みみず、細く長く吹く笛の音。奇＝珍しい。鬧＝騒がし

い、騒々しい、乱れる。絡緯＝くだまき、キリギリス、より小さい虫。聒＝かまびすしい、喧しい。蟬蟋＝こおるぎ、キリギリス。金鐘＝金の杯、壺

型の酒器、あつめる。兒＝子供、童。無名＝名の無い。耳楯＝耳を長くして、耳をそばだてる。楯＝長い、丈が高い、到る、懇ろ、至つて。清亮＝清

く明らか。恍訝＝かすかに訝る、かすかに疑う。恍＝うつとり、ほのか、かすか、訝＝いぶかる、うがい、あやしむ。種々＝いろいろ。切々＝心から欲

し、抑える事の出来ないさま、強い共感を相手に与えるさま。不平＝不満で気持ちが収まらないさま。膏＝あられ、みぞれ、そら、遠い空、膏。噫＝

感嘆の声。螺蟲＝にな、かたつむり。沈黙＝黙り込む。天資＝天より与えられた素質、生まれながらの資質。訥々＝口へた、どもる。終日＝一日中。聒々

＝かまびすしい、喧しい。多言＝多く言う。無言＝何も言わない。宣尼孔子のごと、漢の平帝のとき孔子に贈り名して褒成宣尼公と言った。聒囊＝袋の

口を閉じる、括りまとめる、ひとまとめにする、口をつむぐ、知能を隠す。寧＝やすらか、おだやか、むしろ、なんぞ、いずくんぞ。咎＝とがめしめる、

非難する。无＝息がつまる。饒舌＝おしゃべり。

通釈

粗末な家に秋草の生える夕べ、さつと吹く風に涼風が起る、虫の音が草むらのなかで起り、小さな密

やかな声が珍しい、細長く吹く笛の音が荒く並べるように響き、蛙の腹鼓が前の池で騒がしい、くだまき、キリギリスより小さい虫の音どうして喧しい、こつろぎ、キリギリスの声どうして悲しい、清らかで明るいことは最も喜ばしい、即ち是れ金の杯の兎、中に名もない虫もある、その声は細く糸のようである、耳を長くして静かにこれを聞く、幽かに訝る雨になるとき、その声實にさまざまで、強い共感を覚え皆悲しみおさえることができない、底辺では不満で気持ち納まらないことがある、宵も更けて誰に向かって訴えようか、ああ私はまた蝮へびか蝸牛かたむしになるつ、黙り込むのは生まれつき素質である、言いたいと思っけれども口下手で言えない、一日中言葉が出て来ない、清らかな音は人をして楽しませる、私はまたそれをする事ができない、喧しさと懇ろに胸に迫る、またこれをかえずことは出来ない、多く言うことは老子が戒める、何も云わないことは孔子から学ぶ、口を噤み咎めるはむしる息がつまる、お喋りは身をして危険にする。

38 錦里狂夫

錦里きんりの狂夫きやうぶ

日與古人相對談

日々にちじち 古人こじんと相對あいたいして談かたり

坐無長物一書函

坐まして長物ちやうぶつ一書いつしよの函かん 無なし

閑吟山月成青眼

閑吟さんげつ山月かんぎん成なる青眼せいがんを成なし

高臥柴門只墨聒

高臥かうが柴門さいもんに高臥かうがして只ただ墨くろく聒かまひす

若也賦詩落第二

若ま也も賦詩ふし落おちる第二ごふに落おちす

無為読易絶篇三

無為むゐ 読よみ易やくく絶篇へんの三さん

優遊率歳無求世

優遊ゆうゆう 歳さいを率すべをいいて世よに求もとむるも無なし

錦里狂夫其姓南

錦里きんりの狂夫きやうぶ其その姓せいは南みなみ

語釈 錦里きんり 錦の里、錦川の辺。狂夫きやうぶ 氣の狂つた男、でたらめな言動をする男、自分のことをへりくだってという言葉。長物ちやうぶつ 場所をとるばかり

で役に立たない。一書函いつしよかん 一の書箱。閑かん 長閑に、暇。青眼せいがん 喜んでまともに見る目つき、晋の阮籍は自分の好きな人を青眼で迎え、嫌いな人は白眼で迎えた故事。柴門さいもん 柴の門、門を閉じて、外部と交際しない、柴を積んで門を塞ぐの意、隱者の家の門。臥が 臥せる、寝る、病臥。聒かまひ かまびすしい、喧しい。賦ふ 詩を作る、詠む、詠つ。易絶篇えきせつぺん 三 易経。優遊ゆうゆう 暇が有つてゆつたりとしたさま、のびのびと思いのまま、あくせくしないで運命に任せる

さま。率歳^{そつじ}〓年の終わり、年末。姓南^{せいなん}〓姓は南部^{せいなん}。

通釈 日々昔の人と向かい合って語る、座っていて場所をとるばかりで役に立たない一書の箱が無い、山や月に

向かい長閑に吟じれば喜んでまともに見る、外部と交際しないで柴の門を閉じて高枕で寝るも暗く喧^{かまひ}しい、また

詩を賦すがごとく第二に落とす、自然のままに読み易く絶篇の三、伸び伸びと思いのままに歳を終え世に求めるも

のではない、錦川の畔の狂った人その姓は南部という。

39 趣由宇即事

由宇に趣く即事

行々自是暢吟懷

行々 是 自ら吟懷を暢ぶ

島嶼州汀入眼佳

島嶼の州汀 眼に入りて佳し

醉脚不前海村路

醉脚 前まず海村の路

軟沙如雪没青鞋

軟沙 雪の如し青鞋を没す

潮汐洗塵一點空

潮汐 塵を洗って一點 空しく

軟沙一帶雪相同

軟沙の一帶 雪 相い同じ

黑礧風惡濤声白

黑礧 風 惡ても濤声 白し

木霜降葉色紅

青木 霜 降りて葉色 紅なり

(青木黑礧皆村名黑礧石悉黑此日予訪山本氏) (青木黑礧皆な村の名黑礧石 悉く黑此日予は訪う山

本氏)

落日片帆姫子島

落日の片帆 姫子島

寒樹雙樹大王峰

寒樹に雙樹 大王の峰

酔人数里山家酒

人は數里の山家の酒に酔つ

新釀雖甘奈少功

新釀甘しと雖も奈せん功少し

語釈

吟懷ぎんわい＝思いを吟じる。暢ぶちやうぶ＝心伸びやかに。島嶼しまう＝島、小島。州汀しゅうてい＝中州や渚、水中に土砂が積もつて出来た低い陸地、中州、なぎさと

中州。酔脚すいきゃく＝酔つた人の足、脚。海村かいそん＝海辺の村、漁村。軟沙なんさ＝柔らかい砂、沙青鞋させいげい＝草鞋。潮汐しほしほ＝潮。朝の潮汐あさのしほしほ、夕の汐ゆふのしほ、落日らくじつ＝日が落ちる、夕

日。塵ちり＝世上の煩わしいこと。一點いってん、一点、極小のぼち、ぼち。空くう＝空、虚しい何もない。濤声たうせい＝波の音、大きな波の音。悉しつ＝悉く全て、一切。片帆へんぱん

。片帆かたぱん＝寒樹かむ＝寒い季節の木、冬木立。雙樹しゅうじゆ＝双樹、双の樹、二本の木。大王峰だいおうほう＝峰の名、姫子島ひめこじま＝岩国市沖合いの島。山家やまが＝山中の家。新釀しんじやう

＝新酒。青木黒磯あおきくろいそ＝岩国市内。

通釈 道を行きながら思うことを吟じ心伸びやかである、小島の中州や渚が目に入り佳い眺めである、酒に酔つた

足取りべなかなか進まない海辺の村の道、軟らかい砂は雪のようで草鞋が埋まる、朝の潮や夕べの汐が塵を洗つて

一点空しい、軟らかい砂の一带雪と同じで有る、黒磯村は風が強く波が音高く白い、青木村は霜が降つて木の葉

が紅葉している、夕陽の姫小島の辺りにぼつんと帆掛け舟が見える、冬木立に二本の木が見える大王の峰、人は数

里もある山中の家の酒に酔つ、新酒は甘いと云つがぐつしよともなく出来るのが少ない。

40 偶成

偶成くうせい

杜門絶俗樂清貧

門を杜ふさぎ俗ぞくを絶たちて清貧せいひんを樂たのしむ

安樂窩中安樂身

安あんじて窩かちゅう中樂がくしみ安あんじて身みを樂たのしまん

蔬食飽來曲肱臥

蔬食そしょくに飽あき來きりて肱ひじを曲まげて臥がせば

一窗風月閑人

一窗いっそうの風月ふうげつ 閑人かんじんに屬ぞくす

語釈

偶成くうせい 偶いふと思おもいついて出來いる、また、その作品。杜門ともん 門かどを閉とざす、門かどを塞ふす。清貧せいひん ずつからかんで貧ひん乏びん、潔けつ白ぱくな行ぎやういのため貧ひん乏びんなこと、

貧ひん乏びんで節操せつそうを守まもっていること。安樂あんらく 平和へいわを妨たがげる者ものや、お金かねに困こまらず、楽らくなさま。窩中かちゅう 穴あなの中なか、あなぐら。蔬食そしょく 蔬そ、野菜やさい、食用じゆうようとする草くさや野菜やさいの

総称そうしやう、粗末そまつな食事じきじ。肱ひじ 肘ひじ。臥が 臥ふせる、寝ねる、病臥びやうが。一窗いっそう 一窓いっそう、一いっつの窓まど、部屋へや。家いへ。風月ふうげつ 風かぜや月つき、心こころを和ならげるものとしての自然界しぜんかいの風物ふうぶつ。閑人かんじん

暇人あひだひ、暇あひだのある人ひと。屬ぞく 屬ぞく、やから、みうち、仲間なか、連つねる。

通釈

門かどを閉とざして世俗せきぞくを断たち貧ひん乏びんでも節操せつそうを守まもることを樂たのしむ、平和へいわを妨たがげられず穴あなの中なかの安あらかで樂たのな身み、

野草やそうなどの粗末そまつな食事じきじに飽あきてきて肘枕ひじまくらで寝ねていれば一いっつの窓まどからみる心こころ和ならげる自然界しぜんかいの風物ふうぶつを眺ながめる暇人あひだひに連つなる。

41 歳暮

歳暮

飄々一劍老風塵

ひょうひょう いっけん ふうじん
飄々と一劍 風塵に老ゆ

依舊官梅又洩春

かんばい
舊に依つて官梅 又た春に洩ぶ

自是江湖天地濶

こころ
自らはれ江湖 天地 濶し

悔悟不早為漁人

かいご
悔悟すること早からず漁人の為に

語釈

歳暮＝年の暮れ、年末、歳末、また、年末の贈り物の略。飄々＝風に吹かれ軽く上がるさま、翻るさま、彷徨うさま、世間、離れて、

つかまえたところがないさま。一劍＝一つの剣、一と振りの剣。風塵＝風と塵、煩わしく汚らわしい物事のたとえ、浮き世、俗世界、世間の俗事。舊に依

り＝昔のまま、もどどつり。官梅＝城中の梅。江湖＝大きな川や湖。人里離れた川や湖、官に仕えず世を捨てた人の居る所。天地＝天と地。濶＝広い、

心がひろく、おおらか。悔悟＝過ちを悔い悟る。漁人＝釣りする人、漁夫。

通釈

風に任せて世間離れに一振りの剣も世俗の煩わしさに老けていく、普通りに城中の梅にまた春が洩れてく

る、自ずからはれ官に仕えず世を捨てた人の住む所の天と地は廣くおおらかである、過ちを悔い悟ること早くな

い漁夫の為に。

42 癸卯九日獨酌有感而作

癸卯九日獨り酌みて感有りての作

誰復龍山會孟嘉

誰か復た龍山の孟嘉に會つ

故人半故實堪嗟

故人半ば故より實に嗟くに堪えん

年々不改東籬色

年々 改らず東籬の色

雨吐幽香掬有華

雨は幽香を吐きて掬う華有り

語釈

癸卯きうぼう 天保十四年、一八四三。酌しやく 酒を酌む。龍山りゆうざん 山名。地名。孟もう 孟子。嘉會かかい 万物の立派な集まり、目出度い宴の集い、良

い巡り合わせ。故人こじん 昔馴染みの人、昔の友人もんじん、部下に対する自称。死んだ人。故實こじつ 昔の法令や任儀式の規定、慣例など。堪かん 堪る我慢する。

嗟あ 感嘆の言葉にあたる事が出来る。年々ねんねん 年毎に。東籬とうし 東の垣根。塙と 吐き出す、開く。掬く 掬つ、汲む。

通釈 誰かまた龍山のためたい宴で孟子に會つ、昔の友人半ば亡く實に嘆くに堪えられようか、年毎に東の垣根

の色はは改まらない、雨は幽かな香りを放ち手に掬つと花がある。

43 悲秋の辭

悲秋の辭

蟲唧々兮夜悠々

蟲は唧々として夜悠々たり

白露蕭々降梧楸

白露 蕭々として梧楸に降る

人之可哀此熒獨

人は之れ哀む可し此の熒獨を

時之可悲莫若秋

時之れ悲む可し秋に若う莫れ

可哀人兮可悲節

人を哀む可し節を悲む可し

相逢悲哀何其休

相逢う悲哀何んぞ其れ休さん

聞彼鳶聲迷寒雨

彼の鳶聲を聞えて寒雨に迷う

悄悄趣異鄉游若

悄悄として異郷に遊ぶ趣きなるが若し

聞彼暮鐘隱徹骨

彼の暮鐘を聞きて骨に徹るを隠す

慘如送柩向山陬

惨なり柩を送り山陬に向う如し

聞彼風聲颯撼樹

彼の風聲聞えての颯として樹を撼がす

如征戍聞戈觸矛

征戍の如く戈 矛に觸れるを聞く

臨彼深淵凝而碧
凜若臨壙難久留
見彼白日晼晚入
黯黯慘悴難凝眸
見彼空山夕露骨
蕭條如百歲髑體
上望蒼穹下黃壤
山川何處堪回頭
仰則歛兮俯則歛
立亦愁兮坐亦愁
入耳風聲觸眼月
盡為吾儂涕淚流
嗚乎秋氣固悲矣
况余愁人宋玉儔

彼の深淵しんえんを臨のぞめば凝ぎやうして碧みどりなり
凜りんとして壙こうに臨のぞむが若ごとく久とこしく留とどまり難がたし
彼あ 白日はくじつに晼えん晩ばんに入いるを見みる
黯あん黯たんたる慘さん悴すい 眸ひとみを凝こらし難がたし
彼の空山くうざんを見れば山は骨を露あす
蕭條しょうじょうとして髑體びやくたい 百歲ひゃくさいの如ごとし
上うへに蒼穹そうきやうを望のぞみて黃壤わうじやうを下くだる
山川さんせん 何處いずこにか頭こゝろを回めぐり堪たえゆ
仰すなわぎて則なげち歛うなだき俯すなわれて則なげち歛なげく
立たち亦また愁うれい坐まして亦また愁うれう
耳みみに入いる風聲ふうせい眼まなこに觸ふれる月つき
盡ことごとく吾儂われらのために涕淚ていらい 流ながす
嗚乎ああ 秋氣しゅうき 固かたく悲かなむ矣や
况いはんんや余われれ愁うれえん人ひと宋玉そうぎよくの儔ちゆうを

四歳失怙五歳特

孤惇煢々身安投

幸有姑也撫予養

儻居屢為鵲巢鳩

十三讀書學斯道

余也所願為孔丘

賦詩最喜杜工部

作文甚愛韓潮州

繪事殊好倪迂筆

臨池深慕其姓歐

二十客氣未除去

氣蓋茫茫五大州

嘆息子期骨已朽

美玉緼檀價難求

四歳にして怙を失ひ五歳にしてひとり

孤は煢々に惇く身は安んじて投ず

幸に姑有りて也た撫して予を養う

儻居 屢ば鵲巢の鳩を為す

十三にして書を讀み斯の道を學ぶ

余 也た願う所 孔丘を為す

詩を賦して最も喜ぶ杜工部

文を作して甚だ愛す韓潮州

繪事 殊に好む倪迂の筆

臨池は深く其の姓 歐を慕う

二十になるも客氣未だ除き去らず

氣は茫茫として五大州を蓋い

嘆息す子に骨已に朽ちるを期すこと

美しき玉緼檀は價は求め難し

輒軻齷齪度幾歲
命薄万事不自由
衣食日貧不自給
纒以豆粥潤吾喉
典衣々盡計亦盡
初信鱣鯨制蝗蝻
貧人憫予不自給
富人無求不予賙
惡其不可飢且斃
死生亦大獨自憂
自尤不知其所以
尤人難尤向誰尤
無端也發史公惑
欲言天道儻非不

輒軻 齷齪として幾歳を度る
命薄くして万事 自由にならず
衣食は日に貧しくして自給ならず
纒に豆粥を以つて吾が喉を潤す
衣典の衣は 盡く計れど亦た盡きる
初めて鱣鯨 蝗蝻を制するを信ず
貧人は予を 憫むも自給ならず
富人は求めて予 賙せざるは無し
悪むは其の可からざるは飢えて且つ斃ることなり
死生亦た大なり獨り自から憂るなり
自から尤め其の所以を知らず
人を尤め尤め難きは誰に向つて尤めん
端 無くも也た發す史公の惑わすを
天道に言わんと欲すれど儻は非る

上天不言不得問
交游零落何處謀
作賦欲歌腸枯矣
沈吟深恥歐陽脩
吟苦体倦忽結夢
々上天公白玉樓
樓上高揭李賀記
書以金碧飾琳瑯
字如蝌蛙不可讀
箝口低徊独自羞
忽見上帝騎虬至
蹌蹌稽顙拜冕旒
上帝似憫吾窮甚
賜衣賜食侍吾優

上天は言はず問うを得ずや不いな
交游 零落せるは何處の謀りごとか
賦を作し歌わんと欲すれど腸は枯るなり
沈吟するは歐陽脩に深く恥るのみ
吟いて苦しく体 倦れて忽ち夢を結ぶ
夢は天公の白玉樓に上る
樓上 高く掲る李賀の記
書は金碧を以つて琳瑯 飾れなり
字は蝌蛙の如く讀を可からず
口を箝し低徊して独り自から羞る
忽ち見る上帝に騎虬の至るを
蹌蹌と稽顙して冕旒を拜す
上帝 吾が窮を甚だ憫れむが似く
衣を賜り食を賜り吾に侍すこと優なり

駢駘俎豆列珍味
瑠璃壺瓶盛新菊
天女忽奏霓裳曲
琅璫曼玉與鳴球
嫦娥按歌王母舞
吾與玉皇獻且酬
三成樂闋帝語我
天上人間樂不侔
人間富貴如朝露
人間生死似蜉蝣
爾且休愁爾且飲
々了而睡鼾鼻々
是即上界神仙樂
何須為賊為王侯

駢そとう駘たくのう俎ちんみ豆なら列なら珍味ちんみを列ならべ
瑠璃るりの壺瓶こへいに新菊しんすうを盛せり
天女てんにょ忽かな奏かなでるの霓裳げいしやうの曲きょく
琅璫るうしやう 玉ぎよくを曼うち鳴たまる球あたまを與あつ
嫦娥じやうが 歌あかを按おさえて王母わうぼの舞まひ
吾われと玉皇ぎよくていに獻けんじて且しばらく酬むくいる
三さんたび樂がくを成なして闋あわり帝我みかどわれに語かたる
天上てんじやう 人間じんかん 樂まのしみは侔ひとしからず
人間じんかんの富貴ふうき 朝露あさつゆの如ごとし
人間にんげんの生死せいし 蜉蝣ふゆうに似にる
爾なんじ且しばらく愁うれいを休なんし爾なんじ且しばらく飲のみめ
飲のみみ了おえて睡ねむること鼾いびき 鼻はな々ういたり
是こゝれ即すなはち上界じやうかい 神仙しんせんの樂たのしみしみ
何なんぞ須もといん賊ぞくの為ために王侯わうきうは為なさん

定命雖朕亦難奈

命を定めるは朕と雖も亦た奈とも難し

蓋棺自有辨薰蕕

棺の蓋は自から薰蕕を辨ずるを有す

言訖蓮燭送吾出

言い訖え蓮燭 吾を出て送る

天風吹衣異香浮

天風 衣を吹きて異香 浮かび

歸家一夢俄然覺

家に歸り一夢 俄然 覺むれば

青燈欲滅蓋無油

青燈滅せんと欲して蓋の油無し

窓風悽々月色冷

窓風 悽々と月色 冷やうあかにして

依然薄寒透蔽裘

依然たる薄寒 蔽裘を透す

語釈

悲秋の辭=悲しみに深く沈む気持ちの詩、 辭 啣々=小さな声、 虫や小鳥の幽かな声。 悠々=うれえるさま、 遠く遙かなさま、 暇の有るさま

ま、 のんびりしたさま、 広く行き渡るさま。 蕭々=物寂しいさま、 風や雨の音の寂しいさま。 梧=青桐、 琴を作る材料になる。 楸=ひさぎ、 碁盤を作る材料になる。 哀=哀む、 哀に思つ、 悲しむ。 鶯=鳥が飛び巡る、 独り者。 悲哀=悲しみと哀れ。 休す=さいわい、 おおいに、 ゆるす、 やすむ。

いこう、 やめる、 とどまる、 いたみあわれむ。 鴈=雁、 雁にせ、 にせもの。 寒雨=冷たい雨、 冬の雨。 悄々=憂えるさま、 悄然、 異郷=異國、 他國。

趣き=行き。 遊=遊ぶ、 遊ぶ。 暮鐘=暮れの鐘。 徹す=貫徹、 とおる、 つぎとおすところ。 颯=疾風、 風がさつと吹くさま、 群飛ぶさま、 清らかな

さま。 樹撼=木を動かす、 動く、 揺るがす、 揺れ動く。 征戍=征、 討ちに行く、 責め懲らす、 行く。 戍=守る、 守り国境を守る。 矛=ほこ。 戈

=ほこ、 枝のあるほこ。 凝す=眼を凝らす、 じっと見る。 碧=青、 青い。 凜=さむい、 身にしてみても寒い、 きびしい、 きりっとしたさま、 身の引き締まる

さま。墳つち＝穴、墓穴。白日はくじつ＝昼間、日中。黯あせ＝薄暗くはつきりしないさま。失望しつぱつのさま。惨悴せんすい＝痛ましく憂える、惨く悩む、惨めで棄れる。眸まゆ＝眸、目玉の黒い所、良く見る。空山くうざん＝空と山、空に聳える山。山骨さんこつ＝山の形。山の姿。露つゆ＝つゆ。露あ見み＝姿を見せる。蕭條せうじょう＝物寂しいさま、風や雨の音が寂しい。隱微いんゐ＝隠れ通す。隱微いんゐ＝人のきずかない微妙な所、隠れて幽かなこと。觸護しゆくご＝骸骨、死体。蒼穹そうきゆう＝青い空。黃壤わうじやう＝黄色の大地、土、黄土。山川何處さんせんどこ＝山や川は何処に有るか。歎なげ＝むせび泣く、すすり泣く。俯ふ＝伏せる、下を見る。風聲ふうせい＝風の音、世上の声。盡じん＝盡る、尽くす、終わる。吾儕ごせい＝吾と儕。涕淚ていれい＝涙を流して泣く。嗚乎ああ＝感嘆の声。秋氣しゅうき＝秋の氣配、冷たい氣配、寒氣。宋玉そうぎく＝戦国時代楚の人、屈原の弟子、作品として楚辞等有り。怙こ＝父、たのむ、たよる。孤惻こさつ＝独り者、兄弟の無い者。紫々しやくしやく＝独り者、孤鳥が飛び巡る。撫養ぶよう＝養う、養われる、可愛がる。悅居えつこ＝借家する、家を賃借する。屢りゆ＝屢々、毎度、度々。鵲巢鳩じやくそうこう＝鳩は自分で巢を作れず、カササギの作った巢に住むの意。斯道しだう＝此の道、聖人の道其の人が携わっている技芸や学問の道。孔丘こうきゆう＝孔子のこと。儒にゆ＝ともがら、なかま、連れ立つ。杜工部とくこうぶ＝杜甫、盛唐の大詩人、著書に杜工部集がある。韓潮州かんちゆうしゆう＝今の広東省潮安縣地方、韓愈詩、夕泛潮州路八千。繪事えいじ＝絵を描くこと。倪元代げいげんの画家の名、倪黄と倪鶴。汪筆わうひつ＝まがる、曲げる、筆に疎い、遠回り。姓歐せいおう＝姓は姓、歐陽修、北宋の政治家で文字学者、歐陽詞、唐の書家。客氣きやくき＝客の氣分、一時的な勇氣、空元氣、血氣、遠慮がちな氣持ち、態度よそ行き二十の態度。氣蓋きがい＝意氣さかんに。茫々ぼうぼう＝ぼつととしてはつきりしないさま、岐路微路として果てしないさま、さかなさま。五大州ごたいしゆう＝五大陸。嘆息たんそく＝ため息。子し＝孔子。「こて、壁を塗る道具、壁を塗る。櫃びい＝はこ、蓋付きの箱。價か＝價格が急騰するさま。緼うん＝古い綿、縫れた麻、古綿に新綿を継ぎ足す、天地の氣、さかんに立ち上るさま。齷齪しやくそく＝齒並びが細かいさま、転じて、事が細かい、こせつく、あくせくする。幾歲いくさい＝幾年、何年。輻輳ふくそう＝車の行き悩むさま、事柄が思つように行かず不幸、不遇なさま。万事ばんじ＝沢山のこと、いろ入ること。自由じゆう＝氣儘、思つままにする、自在、他から規定拘束、強制、支配を受けないで全て自分の意志に依つて行動出来ること。衣食いしょく＝衣料と食料。自給じきつ＝自分で自分の生活にあてる、自分で暮らしを立てること纒たねに＝僅かに、少し。豆粥とうしやく＝豆の入った粥。吾喉ごのどを潤うるす＝吾食事する、粥を喉に流しこむ。衣典いてん＝衣類を質入れする。盡じん＝衣盡る、質にする衣類が無くなった。計亦盡けいよくじん＝生計が立たなくなった。蟻あ＝あり。螻ろう＝けら、オケラ。貧人ひんじん＝貧乏人。自尤じゆう＝自らとがめる。憫びん＝憫む心配する、憂える、不憫。富人ふじん＝富める人、金持ち。矧しやう＝あたえる、足りない物を足す、救つ、恵む。飢う＝飢える、食べ物が無い、穀物が実らない、凶作。斃へい＝倒れる、倒れて死ぬ、ひっくり返る。死生しせい＝生死。發はつ＝放つ、行く、出る、進む、起こる、開く、開ける。史公しこう＝人名、史魚か。惑まど＝惑つ、迷つ、迷惑。天道てんたう＝天の道、自然の原理。儻たう＝優れる、ひろやか、心が広く物に拘らない。上天じやうてん＝上天公、天子。交游きやうゆう＝つきあい、交際、友人。零落れいらく＝草木が枯れ萎む、

草が枯れる腸（ちん） 腸、内蔵、腹の中。枯（か） 枯る、衰える、草木の生気が無くなる、痩せ衰える。沈吟（しん） 思いに耽て口ずさむ、思いを潜め十分に検討する。歐陽脩（おう） 北宋の政治家で文学者。吟苦（ぎん） 吟、詠つに苦しむ、吟詩がなかなか出来ない。忽（こつ） 忽ち、俄に、直ちに。上天公（てん） 天子、天帝。白玉樓（はく） 文人の死を言つ、唐詩紀事より。樓上（ろう） 楼閣の上、重層の家。李賀記（り） 李賀、中唐の詩人、唐室の一族、記、昌谷集四巻のこと。書（しよ） 書名、書経。金碧（こん） 黄金と碧玉、金色と青色。飾（しき） 琳瑯（りん） 玉の鳴る音、清らかな水音の形容。初信（しよ） 最初の信書。鱧（たん） ちよづめ、川蛇。鯨（けい） 鯨。蝮（ぶ） 蝮。蛭（しや） 蛭。蝮（ぶ） おたまじやくし、蛙の子。蛙（けい） 蛙。口箱（く） 口を閉ざす、挟む、首枷、閉ざす。低徊（てい） 立ち去り難くつらつらのを零と言つ、木が枯れるのを落と言つ、落ちぶれて淋しい。謀（ぼう） 謀る、物事を相談する、計画する、企て、手段、企みする。羞（しう） 羞しい、恥ずかしい、恥じる。踰躄（ゆう） 踰躄めきながら走る、動作に威儀がある。稽顙（けい） 坐して頭を地面に暫くの間つけている礼、頓首と共に最敬礼。冕旒（みん） 糸で玉を貫いて前後に飾りにして、垂らしてある冠、貴人の冠。上帝（じ） 上帝。上皇（じやう） 吾窮（わ） 吾窮す、吾貧（みん） 吾貧す、貧困。甚憫（じん） 甚だ哀れ、不憫（ふ） 不憫。駘駘（た） 駘駘、粗豆（そ） 粗豆、まな板とたがつき、祭りの供物を盛る器。瑠璃（る） 瑠璃、玉の名、紺青色の美玉で七宝の一つ。珍珠（しん） 珍珠、珍しい味、ご馳走。壺瓶（う） 壺や瓶。新菊（しん） 新しい野菜、まぐさ、くさを刈る。天女（てん） 織女星の別名、天界にすむ乙女、美人のたとえ。奏（そう） 奏す、奏でる。霓裳（い） 虹のように美しいもすそ、白居易、長恨歌より驚破霓裳羽衣曲。琅玕（ろう） 真珠に似た美しい玉。曇玉（どん） 玉とふれ合つて鳴る音の意。うつ、叩く、矛、嫦娥、月に住む美人の名。按（あん） 按す、おさえる、手で押さえつける、引き留める、押しとどめる、調べる問いたたす、かながえる。王母（わ） 祖母を疎んじて言つ言葉。西王母の略称。玉皇（ぎやう） 玉帝、道教での天帝。獻（けん） 獻す、献上。酬（しゆ） むくいる、すすめる、互いに酒を酌み交わす、主人が客に酒をすすめる。三成樂（さん） 三つの楽器より成る音楽。閏（にち） 音楽の一曲が終わる、止む、尽きる、終わる。帝我天上（てい） 帝は天上人。人間樂（にち） 一般の人の楽しみ。侔（ぼう） 等しい、努める、取る。人間（じん） 人間の世、世間。人間（じん） 人間、漢文では原則として、人の意と区別してじんかんと読む。富貴（ふう） 金持ちで身分が高い。朝露（あ） のし人間の生死、朝露のように人間のせいしは、儂いもの。蜉蝣（ふう） カゲロウ、陽炎、蜻蛉。軒（けん） 軒、軒の音、鼻息、高軒、上界。天上の世界、神仙や神仏の住む所。神仙樂（しん） 神仙の楽しみ、音楽。何須（な） 何を求める。訖（きつ） おわつる、おえる、やめる、ついに、いたる。朕（てん） 天子が自分を指す。雖（し） 虫の名、トカゲに良く似た大きな虫、けれども、たとい、としても、ただ、もし、ごとし、助字。奈（な） いかん、いかんせん、いかんぞ、どつにもしようがない。柩（く） 棺桶、棺柩。薰（く） 薰は香りの良い草、猶（ゆう） は臭い匂いの草、転じて善悪のたとえ。蓮燭（れん） 蓮の形に作つた手燭。天風（てん） 天の風。俄然（が） 俄に、突然、急に。青燈（せい） 青い灯火、寒々とした明かり。滅欲（めつ） 消して欲しい、無くして欲しい。篝（か） 灯心。懷々（わい） 恐ろしいさま、憂い疲れ落ち着かない。月色（げつ） 月のさま。依然（い） もとのまま。蔽裘（へい） 黙類で作つた皮衣を被る、蔽、おおつ、かぶる、おおいかぶせる。

通釈 虫は小さな声で夜は長閑である、白露は物寂しく青桐やひさぎの木に降る、人は哀れみなさいこの独り者を、時これ悲しみなさい秋にしたがわないうで、人は哀れみなさい節義を悲しみなさい、互いに逢う悲哀どうしていたみあわれむ、彼の雁の声を聞いて冷たい雨に迷う、傷み憐れみ他国に行き遊ぶがようである、彼の暮れの鐘を聞いて骨に浸み徹るのを隠す、悲惨である棺を送り山の隈に向かうようである、彼の風の音を風がさつと吹いて樹木を震撼させるのを聞く、戦いに行く兵の戈が矛に触れるのを聞く、彼の深い淵に望み目を凝らし紺碧を見る、身に凍みて寒く墓穴に臨み長く居ることができない、彼日中暗い晩になるを見る、暗く失望して惨めに覆れた眸は目を凝らして見るができない、彼の人気のないひっそりとした山を見れば山の姿形を露す、物寂しく髑髏は百歳のようである、上に青空を望んで黄色の大地に下る、山や川は何処にあるのか頭を廻して堪える、上を仰いでそしてむせび泣く下に俯うなだれてそしてすすり泣く、立ちてまた愁い座れば愁う、耳に入る風の音眼に触れる月、悉く吾や儂の為に涙を流す、ああ秋の気配深く悲しむことであろう、まして私は人を愁う宋玉屈原の弟子の仲間、四歳にして父を失い五歳にして独り、孤児は孤鳥が飛び回るように身を安んじて投じる、幸いに叔母あり可愛がつて私を養ってくれた、借家を屢々する鵲かひなねの巢に入る鳩のように、十三にして書を読み斯の道を学ぶ、私はまた願う所は孔子のように、詩を賦して最も喜ぶのは盛唐の詩人杜甫の杜工部である、文を作りとても愛すのは韓愈の詩韓潮州で

ある、絵を描く事殊更に好む元代の画家倪黄と倪賛の筆である、習字の道は深く慕うのは唐の書家歐陽洵である、二十歳になつても血気が未だ除き去らないでいる、意気は盛んにして五大陸を覆つ、ため息をする孔子の骨は朽ちるほど時期は過ぎてゐる、美しい玉の天地の気を収めた蓋付きの箱の価格は付け難い、不幸せにして全ての事に自分で暮らしを立てることができない、衣食は毎日貧しく自分で生活にあてることができない、僅かに豆粥で我が喉を潤す、質入れの衣類は悉く計れどもまた無くなる、初めてチヨウザメや鯨 蟻やオケラを制するを信じる、貧しい人は私を憐れむが自分で生活にあてることができない、富める人は求めて私に与えざることはない、憎むべきことはその有つてはならない飢え且つ倒れ死ぬことである、生るも死ぬも大事である独り自ら憂うものである、自ら咎めるそのいわれを知らない、人を咎め咎め難いことは誰に向かつて咎めようか、端なくもまた起る史公の惑わすを、自然の原理に云いたいけれど心が廣く物事に拘らないか非難するかどうか、上天公は云わない問うこともできない、交際は枯れ萎むのは何処に物事を相談したものか、賦を作り歌わんとすれども美しい詩文が自在に詠めず泉が枯れてきた、思いを潜め充分検討するも北宋の政治家で文学者歐陽脩に深く恥じる、吟じ苦しみ体が疲れて忽ち眠り夢に入る、夢は天帝 文人が死後に上る白玉楼を、書は黄金と碧玉をもって清らかな玉の鳴る音のように稀である、字はオタマジヤクシカ蛙のようで読むことができない、口を閉ざして彷徨い歩き独り自らを恥じる、忽ち見る上帝に水龍に騎乗して上るのを、威儀を正して頓首とともに最敬礼して糸で玉を貫いて垂らした飾りのついた

貴人の冠を拝見した、天帝 我が窮乏を甚だ憐れむように、衣を賜り吾に侍ること情け深く、祭りの供物を盛る祭具のたかつきに駱駝の腦の珍味を列べ、紺青色の美玉の壺や瓶に新しい野菜を盛る、天女が忽ち奏でる羽衣の曲、真珠に似た美しい玉 玉と触れ合つて鳴る球を与うる、月に棲む美人 歌を押さえて西王母の舞を、吾と道教での天帝に献上して且つ酒を奨める、三度楽しみをして帝 吾に語る、天の世界と人の世の楽しみは同じではない、人の世の金持ちで身分が高い人でも朝露のように儂い、人の世の生と死は蜻蛉かげろうのようである、汝暫く憂いを忘れて汝暫く飲め、飲み終えて眠ること 躰しじま 躰々しじまである、是れ即ち天界の神や仙人の楽しみ、どうして用いる賊の為に王様や諸侯は為すのか、運命を定めるのは天子と雖もまた如何ともでき難い、棺の蓋は自然に芳香かぐと臭いお臭いを弁える、転じて善悪を弁える、言い終えると蓮の形をした手燭を持ち吾を出で送る、天の風が吹き変な香りが浮かぶ、家に帰り一夢俄に醒めれば、寒々とした灯りが消えようとしているが灯心の油がない、窓に当たる風は凄く月の姿は冷ややかである、元の儘薄ら寒く皮衣を透す。

44 聞終吉卜居賦寄

終吉の居を下すると聞き賦して寄す

君家桃李滿門春

君の家 桃李 門に滿ちる春

々風和氣日相親

春風 和氣 日に相親しむ

兄如靈運弟惠連

兄は靈運の如く弟 惠連なり

摘藻如葩妙入神

藻を摘んで葩の如く妙神に入る

兄難為兄弟難弟

兄は兄を為し難く弟は弟を難し

々在前隣兄後隣

弟は前隣に兄は後隣に在り

々々前隣春草夕

後隣 前隣 春草の夕 遣り取りする

新句每成唱酬頻

新句毎に成りて唱酬 頻なり

兄吟弟哦出金石

兄は吟じ弟は哦し金石 出る

擊節吾亦欠壺唇

擊節 吾れ亦た唇に壺を欠く

蟬屐游山同君酒

蟬屐 山に遊び君と酒を同にす

扁舟泛水共我茵

扁舟 水に泛かべて我と茵を共にす

金欄膠漆未足比

金欄 膠漆未だ比ぶるに足らず

當年交情晒雷陳

當年の交情 雷陳に晒わる

忽報君將卜居去

忽ち報ず君の將に卜居去ることを

余也聞之眉為顰

余は也た之を聞き眉を顰るを為す

牽衣止君々那止

衣を牽て君を止めるも君 那んぞ止らず

儘教速霾五車輪

儘教 速やかに五車の輪を霾す

相思千里猶命駕

相思うこと千里 猶を駕を命ず

何矧近在錦水濱

何んぞ矧んや近くの錦水の濱に在り

唯憂明朝君去後

唯だ憂う明朝 君去し後

多是肝膽楚越人

多く是れ肝膽するは楚越の人なり

語釈

終吉 大草齋堂のこと五竹の藩校養老館での学友。居吉ト 占つて住居の吉凶を決める。桃李 桃とスモモ、自分を引き立てたり推薦したりした人、そのように立派な人物。満門 門に満ちる。春風 春の風、穏やかな風。和氣 和やかな空気。相親し 互いに親しむ、仲良くする。靈運 謝惠連の族兄。惠連 南朝宋の謝惠連名文家で族兄の謝惠連に褒められたことが故事となり、後世では優れた弟のことを言う。摘藻 海藻を摘む。葩 花、花弁。華やか。妙神 優れた働きの有る神。前隣 前え隣。後隣 後ろ隣。新句 新しい句。每唱 度々唱え詠う。酬 応酬。頻 度々。頻

りした人、そのように立派な人物。満門 門に満ちる。春風 春の風、穏やかな風。和氣 和やかな空気。相親し 互いに親しむ、仲良くする。靈運 謝惠連の族兄。惠連 南朝宋の謝惠連名文家で族兄の謝惠連に褒められたことが故事となり、後世では優れた弟のことを言う。摘藻 海藻を摘む。葩 花、花弁。華やか。妙神 優れた働きの有る神。前隣 前え隣。後隣 後ろ隣。新句 新しい句。每唱 度々唱え詠う。酬 応酬。頻 度々。頻

繁に。兄吟じ弟し〓兄詠い、吟じ、弟唱和し。金石〓鐘や磬等の楽器。節〓節、詩歌や文章のくぎり。擊節〓料理を食へ酒防いだ。唇に壺を欠く〓酒が飲めない、酒の壺を欠く。蠟屐〓濡れる物を防ぐ履き物、昔は草鞋のたね蠟紙であしを包み濡れるのを防いだ。扁舟〓小舟、底の浅い小さな舟。泛〓浮かべる。茵〓いしとね、敷物。金襴〓織物の一種、繻子の地に平金糸を織り絹糸で模様を表した物。膠漆〓膠と漆。人が互いに親しむこと、固い友情。交情〓交際。友情。雷陳〓後漢の人雷義と陳重の二人の友情が非常に厚かったので友情が非常に厚い人を言う。晒〓笑う、あざ笑う。居ト〓住まいを占いにて決める將〓將に、ながはくは、もって、率いる、はた、それとも。眉〓眉。顰〓顰める、眉に皺をよせる。牽〓牽く、引く。那〓西夷の地名、多い、美しい、安らか、なんぞ、なに、いかなその助字。儘〓たとえ、もし、でも、まかせる、ままに、そのまま、悉く、皆。霾〓霾、つち降る、土曇り、大風が土砂を巻き上げて降らせる、巻き上げた土。砂で空が曇ること。五車輪〓五台の車で運ぶほど。相思〓互いに思う。千里〓千里、非常に遠い。駕〓駕、車や馬につける、乗る、乗り物、車馬、籠、駕籠。矧〓いわんや、まして。錦水濱〓錦水の浜、錦川の畔。唯憂う〓憂うばかり、この事ばかり憂う。肝膽〓肝臓と胆嚢は直ぐ続いているので密接するものたとえ、真心、肝膽相照らす、互いに心の中を打ち明けて親しく交わる。親友。楚越〓楚、いばら、にんじんぼく、昔師は弟子を訓戒するのに人參木の杖を用いた、春秋時代の五霸の一つの国名。越〓春秋時代の国名。

通釈 終吉の居をトするを聞いて賦して寄す。君の家は吾を引き立てたり推薦するような立派な人物の家門に

満ちる春、穏やかな春の風和やかな空気日に日に互いに親しむ、兄謝霊運のように弟は謝惠連なり、兄は兄をとるのは難しく弟は弟となるのは難しい、弟は前隣に在り兄は後る隣に在り、後る隣も前隣も春の草の夕べ、新しい句が常に成り唱え詠み応酬頻繁である、兄は吟じ弟は口ずさみ鐘や磬の楽器がでる、料理や酒を酌む時吾はまた唇に 壺に酒を欠く、草鞋に蠟紙を巻き濡れるのを防ぎ山に遊び君と共に酒を酌む、小舟を川に浮かべ我と敷物を共にする、襦子に平金糸を織り絹糸で模様した布と堅い友情は未だ比べるに足りない、この所の友情は後漢の人雷義

と陳重が笑う、忽ち知れる君の当に占つて決めた住まいを去ることを、私はまたこれを聞き何でと眉を蹙める、衣を牽いて君を留めるも君はどうしてと止まらず、そうであれば速やかに五台の車で運ぶ程の荷を土煙をあげて行くがよい、互いに思ふ千里もの遠く離れても尚駕籠や車馬を命じるであろう、どうしてまして近くの錦川の畔に在るではないか、ただ憂う明日の朝君が去った後、多くこれ互いに心中を打ち明けて親しく交わるのは春秋時代の楚と越の人である。